名張藤堂家邸（県指定史跡）

豊臣兄弟とも深い関わり 藤堂高吉と名張

名張藤堂家の祖・藤堂高吉は、大河ドラマ「豊臣兄弟！」の主人公・豊臣秀長の養子となり、豊臣兄弟と深く関わった人物です。さらに、伊勢・伊賀国（現三重県）を治めた藤堂高虎もまた、高吉を養子として迎えました。そんな高吉は、政治的な対立や時代の変化の中で不遇な立場に置かれ、「悲運の武将」とも言われます。

一方で、時代の荒波を乗り越えながら、名張を城下町・宿場町として発展させた人物でもあります。高吉が生きた時代に注目が集まる今こそ、地域の歴史に息づく「物語」に目を向けてみませんか。

問 文化生涯学習室 ☎63-7892

豊臣秀吉朱印状

藤堂高吉の初陣は朝鮮の役。2度目の朝鮮出兵の際は、豊臣秀吉から心身への健康の配慮や激励の言葉が記された朱印状が届いた。その後も、徳川家康に従って上杉氏討伐の軍に加わり、続いて関ケ原の戦いに転戦したり、大阪冬・夏の陣で武功を立てたりと、藤堂高虎と共に奮戦。果敢に戦国の世をくぐり抜けた。

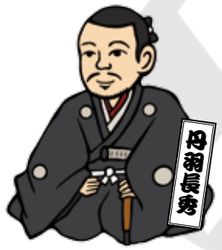
名張藤堂家伝来
寿栄具足（ひさかぐそく）

豊臣秀長や藤堂高虎の養子に ――

戦国武将の思惑に翻弄（ほんろう）された前半生

織田信長の重臣、丹羽長秀の三男として誕生

藤堂高吉は、1579年、織田信長の重臣、丹羽長秀の三男として近江（現 滋賀県）の佐和山城に生まれ、幼名を仙丸と称しました。



高吉の実父、丹羽長秀。信長家臣団の一人で、信長の死後、秀吉を支えるように。

▼

4歳で羽柴秀長の養子に

1582年、本能寺の変で信長が亡くなり、羽柴（豊臣）秀吉は丹羽長秀と合流し、明智光秀を討ち滅ぼします。同年、秀吉の望みにより、仙丸（高吉）は、弟・秀長の養子となります。これは、秀吉が、同じ織田家臣団でライバルであった柴田勝家を討ち滅ぼすために、丹羽長秀と縁を結ぶためであったといわれます。

柴田勝家に対抗するため、丹羽長秀と仲良くなりたい秀吉は、長秀の子・仙丸（高吉）を弟・秀長の養子にと望んだ。

▼

10歳で藤堂高虎の養子に

天下を手中にした秀吉は、姉の子（おい）を秀長の跡取りと決めました。秀長は、仙丸（高吉）の才能を愛し、手放そうとしなかったそうですが、秀吉の厳命で離縁。そこへ現れたのが藤堂高虎です。

高虎は、当時秀長の家臣で33歳。1588年、秀吉にお願いして仙丸を養子に（この頃、仙丸は高吉と名を改めます）。この縁組も、高虎が秀吉・秀長に取り入るための策謀だったともいわれます。

秀吉の実の弟で、天下統一に大きく貢献した豊臣秀長。高吉が高虎の養子となった際には、養育費として高吉に1万石を贈った。

秀長の死後、秀吉直属の大名となった藤堂高虎。秀吉の死後は徳川家康と親しくし、関ヶ原の戦いで奮戦。立身出世を果たす。

▼

22歳で関ケ原の戦いに従軍。高虎に実子が生まれる

14歳の頃、高虎に従い朝鮮の役で初陣。秀吉の死後、高虎は徳川家康に味方し、1600年、関ヶ原の戦いでは、高吉と戦いに加わり戦果をあげます。軍功により、高虎は、今治城主（愛媛県今治市）となり、高吉も城下に屋敷を構えました。こうした中、高虎に実子・高次が生まれます（1602年）。

松山藩と藤堂藩で争いがあり、幕府が事情聴取することに。高吉が出頭し、理路整然とした説明で松山藩を打ち負かしましたが、高虎は密かに高吉を謹慎処分に。3年後、家康の耳に入ると「罪もないのに許せ」との声がかかり、高吉に1万石が加増されたという逸話が残る。

▼

高虎が今治から津へ。高吉、30歳で今治城主に

1608年、高虎は、伊勢・伊賀国へ国替えとなり津城に移ります。高吉は、徳川家康の命により今治に残り、名張に来るまでの27年間を今治城の城主として過ごすことに。この間、大阪冬の陣と夏の陣には、高吉は高虎軍に加わり軍功をあげています。

しかし、高吉の領した2万石は、高虎が支配するものとして変わらず、諸国の大名（1万石以上の領主が大名とされる）が江戸に出向く「参勤交代」が始まっても、高虎は高吉には認めませんでした。そして、1630年に高虎が75歳で生涯を閉じます。この時、高吉は52歳、高次30歳でした。

◎出典：「名張市史」（本記事の年齢は数え年で表記）

時代の荒波を乗り越えて ――

名張のまちの礎を築いた高吉

58 歳で名張へ。古城跡に御殿を構える

藤堂高虎の死後、高吉は、幕府から伊予国（現 愛媛県）と伊勢国の 2 万石を替地するよう指示を受けました。すると、高虎の実子で後継ぎとなっていた高次から、伊勢 2 万石のうち 5 千石を伊賀国の名張周辺と替地するよう勧められ、1636 年正月、高吉は名張に移り住みました。このとき、高吉は 58 歳でした。

高吉は、古城跡に御殿を構えるとともに、家来団を周辺に住まわせ、小規模ながら城下町としての体制を整備。1670 年、92 歳の生涯を名張で終えました。今も残るゆかりの地が、高吉を偲ばせます。

ゆかりの地 寿栄（ひさか）神社（太鼓門）

高吉の死後、家臣たちが高吉を祭神として建てた寿栄神社。「寿栄」は、高吉の戒名からきています。現在、神社内には、御殿の正門であった太鼓門が移築されています。

ゆかりの地 徳蓮院（高吉墓所）

名張藤堂家の菩提寺で、初代高吉から 13 代高伸までの墓所があります。農民を救おうと神域に水路を開き自刃した高吉の家臣・福井文右衛門の遺徳を偲ぶ碑もあります。

ゆかりの地 名張藤堂家邸

秀吉の時代、この辺りの高台は、筒井定次の家臣、松倉氏が築いた名張城がありました。廃城となっていたこの場所に高吉が御殿を構え、明治維新まで存続。江戸時代の終わりには、現存する建物の 10 倍以上、1083 畳を数えるほどの広大な御殿でした。

現在は当主が私的な生活を送っていた部分を公開。屋敷とともに、「豊臣秀吉朱印状」や「朱具足」（上写真）、「鉄唐冠形兜・一の谷形兜」（左写真）、など貴重な文化財を展示しています。

休館日　月・木曜日休館（祝日の場合、翌日）
入場料 一般 200 円、高校生 100 円、小中学生無料

◎ボランティアガイド
おきつもの解説が聞ける火・水曜日の来館がおススメ！

詳しくは市 HP で

枯山水のお庭も見どころです

城下町・宿場町としての発展は高吉に始まる

高吉が名張の地を踏んだ当時、織田軍による伊賀攻めで焦土と化した「天正伊賀の乱」から 50 年近くが経っていましたが、まだ復興には程遠い状況でした。

荒廃した新領地に立った高吉は、神社を再建し、市街地の区画を整理し、伊予国（現愛媛県）から連れてきた家臣や商人、付近から集まる町民の居住地を定めたほか、道路の改修、水利の開発など、今でいう都市計画を実施しました。まさに、名張の城下町・宿場町としての発展は、この高吉の経営から始まったのです。

※高吉（名張藤堂家）が治めたのは、現 名張市域の一部（名張地域と、黒田、瀬古口、赤目町丈六・檀）で、他の地域は、藤堂高虎に始まる藤堂宗家が治めました。

ゆかりの地 城下川（梁瀬（やなせ）水路）

城下川は、屋敷の外堀の機能を与えつつ、名張の水田のかんがい用水として整備されました。高吉は、まちの区画整理とともに、この水路をまちじゅうに張り巡らせました。

高吉公の生涯を思うと、胸に迫るものがある

温故会で徳蓮院の墓所参拝や清掃などを行っているほか、顕彰会では、高吉公について学ぶ機会を設けたり、ゆかりの地にのぼり旗を立てて高吉公の存在をアピールしたりしています。

高吉公は、名張のまちに尽くしてくれた私たちのお殿様。周囲の思惑に翻弄されても、運命にあらがわず、置かれた場所で自分にできることを着実にこなし、遂げていかれました。その生涯を思うと、胸に迫るものがあります。

今後も歴史影絵などを通して、高吉公の功績を伝えていきます。皆さんも高吉公ゆかりの地を巡ってみてください。

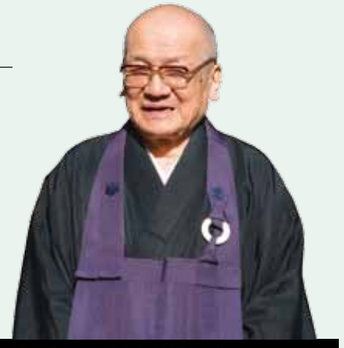
名張藤堂家温故会 会長／藤堂高吉公顕彰会／はなびし庵　角田 勝 さん

争いごとを避け、まちの人たちを大切にした忍耐の人

高吉公が名張へ来る前は空き寺であった徳蓮院ですが、高吉公によって名張藤堂家の菩提寺と定められて以来、歴代のお殿様のお墓を守り伝えてきました。

高吉公は、まさに忍耐の人。高虎に従い数々の戦をくぐり抜け、尽くしてきましたが、後継ぎは実子の高次に譲ることに。争いごとを避けて、まちの人たちを大切にしてきた人物でした。そんな高吉公は、風水を使った区画整理で名張のまちを災いから守ろうとしたのではないかと考え、自身で調べているところです。

市民の皆さんもぜひ、高吉公のお墓に手を合わせに来てください。



名張藤堂家の菩提寺 徳蓮院 住職　井村 道弘 さん